

XenosagaI・II - 第八話 過去 - Vergangenheit -

シオン： さて――と、アレンくん、接続補佐[バックアップ]お願いね。

アレン： りょ、了解。

非局所的連結[インターコネクション]か、開始します。

（――しっかりしろ）

――主任、なにがあってもサポートします。安心して、潜ってください。

シオン： ありがとう。――行くわよ、KOS-MOS。

アレン： （大丈夫、サポートさえしっかりしてれば、簡易モジュールでも問題はない――）

ダミープロトコルにて、接続開始――

シオン： なに、これ――

Jr.： なにが――

アレン： そんな――こんなことって――

――――――！

過 - Vergangenheit - 去

シオン： ―――――

ここは――

どこかで、見たような――

少なくとも、KOS-MOSの深層領域じゃない――わよね。

???： ――父さん！

シオン： とう――さん――

スオウ：さあ、帰ろうか――シオン。

シオン：母さんのところには――行かないの？

スオウ：ああ、今日はね。明日、お見舞いに行こう。――いいね。

シオン：うん――

シオン：待って――ダメ――

???：――行ってはダメ。

シオン：――

???：そう、これはあなたとお父さんが親子で過ごした、最後の一日。

ずっと、あなたたちを待ってたの。――ゆっくりとお話をしたかった。

シオン：あなたは――

旧ミルチア市街

Jr.：ここは――

モモ：足音――？

ジギー：とりあえず、隠れろ。

Jr.：そんな、馬鹿な――

モモ：（Jr.さんと、同じ顔――？）

Jr.：間違いない――U.R.T.V. [U-レトロヴァイラス]――

ジギー：――なるほど、どうやら俺だけが幻覚を見ているわけではないようだな。

ここはどこだ？ 心当たりでもあるのか？

Jr.：――

ジギー：――おい。

Jr.：なんだよっ！

モモ：――

ジギー：心当たりがあるのかと聞いている。

Jr.：ああ、あるぜ。これが幻覚でなけりゃ、そして俺の記憶が正しけりゃ――

ここは――ミルチアだ。十四年前のな！

モモ：Jr.さん！

ジギー：どこへ行く！

モモ：――Jr. さん、どうしたのかしら？ さっきの人たちを追いかけてようとしてるみたいだけど――

ジギー：いずれにしろ、あいつにしかわからん理由があるんだろう。

とにかく状況がつかめない。一人にさせるわけにはいかんな。

公園

シオン：待っていた――私たちを――？

アレン：――主任！

シオン：ケイオスくん、アレンくん――

アレン：主任、ここはどこなんでしょう――

シオン：あなたは――

???：私は――ネピリム。そう呼ばれているわ、私が私として存在した時から――

シオン：ネピリム――

旧ミルチア市街

―――！

Jr.：畜生！ どいつもこいつもウ・ドゥに汚染されやがって―――！

U. R. T. V.：―――！

―――！？

ニグレド：ルベド！ どこなの――赤[ルベド]！

Jr.：ガイ――ナン――

ジギー：ガイナンだと？ しかし、あの顔は――

（Jr. と瓜二つ――どういうことだ――）

モモ：大丈夫――ですか。

Jr.：な、なんでもねえ――

モモ：Jr. さん――

Jr.：なんでもねえつつってんだろっ！！

モモ：―――！！

Jr.： ご、ごめん——つい——

ちくしょう——なんだったんだよ。どうなってんだよ、ここは——！

公園

シオン： じゃあ、やっぱりここは旧ミルチアなの——それも十四年前の——

ネピリム： そう、あなたの意識の底に眠る連綿と続く記憶の世界——

それを KOS-MOS が感じとって、再現しているの。

この世界はね、KOS-MOS の記憶でもあるのよ。

シオン： KOS-MOS の記憶ですって——そんなはずは——

ネピリム： 記憶は個人だけのものではないわ。ひとつ所に留まってもいない——

シオン： 違うの——だって、元型[オリジナル]の KOS-MOS は——

ネピリム： 二年前の”あの時”破壊されたはず——

あなたの大切な人も、死んでしまった——

アレン： —————

ネピリム： 素敵な思い出は半分だけ——残りの半分があって、初めてあなたという意識が形成されているの。

あなたは——ううん、あなたたちはそれを受け入れなければならない。

シオン： 思い出を——受け入れる——

ネピリム： あなたは——ふたたびミルチア[ここ]を訪れなくてはならない。

シオン： —————

——お願い、教えて。どうして私が、ミルチアへ？

ネピリム： その答えは KOS-MOS だけが知っている。この先で、あなたを待っているわ。

シオン： KOS-MOS が——この先で—————

アレン： ま、待ってください、主任！

ケイオス： —————

ネピリム： ——本当に、これでいいのね。もう後戻りはできないのよ。

ケイオス： —————

——わかっている。でも、KOS-MOS[彼女]には、シオンが必要なんだ——

ネピリム： ——あなたにとっても。

あなたはどうするの。

ケイオス：――――

旧ミルチア市街

ジギー：とにかく進むぞー今はそれが最善策だー

Jr.：ああー

Jr.：よせよー冗談だろ。

モモ：どうしたんですか？

――あ！

Jr.：U-TIC 機関中央タワーーラビュリントス。

モモ：ラビュリントスー

???：ハレルヤ！

海はその中にある死人を出[いだ]し、死は陰府[よみ]もその中にある死人を出したればー
各自[おのおの]その行為[このなひ]に随ひて審[さば]かれたりー

モモ：この声ーあれはーあれはパパ！　――パパ！！

ジギー：なに！

止せ、モモ。どこへ行くつもりだ。

モモ：止めないで、パパがーパパが呼んでる！

ジギー：パパだってーおい、そうなのかー？

Jr.：間違いないーヨアキム・ミズラヒだ。

ジギー：あの男がーヨアキム・ミズラヒ。

ヨアキム・ミズラヒ：かくて死も陰府も火の池に投げ入れられたりー此の火の池は第二の死なりー
すべて生命[いのち]の書[ふみ]に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられたりー
歌え、諸人よー饗宴の時は来たれりー

モモ：ダメー！
パーパー

Jr.：モモ

ジギー：この光景ーここは本当に、十四年前のミルチアなのかー

Jr.：うおおお！

モモ：きゃあああ！

Jr.：――――！

モモ：――――！

ジギー：――――！

モモ：うーう、ううー
パパー初めて、会えたのにー

Jr.：モモ

モモ：Jr.さんー

Jr.：モモー全部、十四年前に、もう起こっちゃったことなんだ。

モモ：――――

Jr.：ー行こう。誰が、なんのために、俺たちにあんな光景を見せたのかー
そいつを見つけに行くんだ。

モモ：―――はい。

森

シオン：この森、見覚えがある。たしか、あの向こうにー
行きましょう、アレンくん、ケイオスくん。

アレン：え、ええー

ケイオス：そうだね、行ってみよう。

――？

ケイオス：――？ なんだろう、今のー

アレン：ウサギーかな？

シオン：ウサギにしては、大きすぎない？　なんだか気になるわね――

アレン：ここ――さっきのウサギがいたところですよ。

ケイオス：たしか――切り株のところで何かしていたよね。

シオン：調べてみましょう――

穴があるわ。中に何かあるみたい――

ダメね――穴が小さすぎて、手が入らないわ。

ケイオス：ボクがやってみようか？

シオン：ケイオスくんでも無理だと思う。この穴、すごく小さいもの。

アレン：あのウサギが宝物でも隠してるんですかね？

シオン：さあ――どうかしらね。仕方ないわ、先へ進みましょう。

アレン：あのウサギですよ！　追いかけてみましょう！

シオン：ちょっと、アレンくん！

ケイオス：シオン、ボクたちも追おう！

シオン：そ、そうね！

シオン：――アレンくん、どこまで行ったのかしら――

ケイオス：あ、いたよ、シオン。――ほら、あそこ。

シオン：もう、アレンくんったら、あんなに小さく見えるくらい遠くまで行っちゃって――

アレン：主任！

シオン：あら、おかしいわね――声は近くから聞こえるわ――

アレン：主任！　僕はここにいますってば！

シオン：ア、アアア、アレンくん！？　いったいどうしたのよっ！！　なんで小さくなってるのっ！？

アレン：そ、それが――あのウサギを捕まえようと後ろから近づいたら、急に目の前が真っ白になって――

気がついたら、こんなサイズに――ど、どうしましょう、主任――？

シオン：そんな――どうしましょうって言われても――

ケイオス：あのウサギを見つけるしかないね。

シオン：そーそーうね！

ケイオス：アレンさん、あのウサギ、どっちへ行きました？

アレン：あっちに逃げていったーと、思う。

ケイオス：他になにか覚えてることは？

アレン：そういえばー後ろから近づいた時、すごく恐ろしい顔を見た気がするー

ケイオス：後ろ姿なのに顔ー？

シオン：とにかく追いましょう！

ケイオス：うん。

ー アレン：そうだ、主任！ 今の僕なら切り株の穴の中に入れるかもしれませんよ！

ちょっと行ってきますね！

シオン：ア、アレンくん！ 待ちなさいっ！

アレン：こんな僕でも主任の役に立てた！ これで主任の喜ぶ顔が見られるかな♪

アレン：主任！ 見てください、これー

シオン：もうーアレンくん！ 勝手なことしないのっ！

さっきだって、一人で追いかけていったからこんな目にあっているんでしょう！

アレン：す、すみませんー

ケイオス：まあまあ、アレンさんだって悪気があったわけじゃないんだしー

シオン：もう！ ケイオスくんも甘いんだからー

アレンくん、わかったわね！

アレン：は、はいー

（喜ぶ顔どころか、怒られるとはーとほほー）

シオン：いたわ！ 捕まえましょう！

ケイオス：シオン、後ろ姿には気をつけて！

シオン：わ、わかったわ！

アレン：あっ、あの顔！ 主任！ あぶないっ！

うわっ！

ケイオス：あ、アレンさん！

アレン：あれ？ 元に戻ってる――

シオン：アレンくん、よかった――本当にどうしようかと――

アレン：主任――ご心配かけて――

ケイオス：――――

シオン：どうしたの、ケイオスくん？

ケイオス：ここはエンセフェロン内だから現実世界に戻れば、元の大きさに戻るんじゃないかなって――

シオン：あ、それは言えてるわね。現実世界に戻っても小さいままなのは物理的にありえないし――

いらぬ心配だったみたい――それじゃあ、先を急ぎましょう。

ケイオス：そうだね。

アレン：そ、そんな――待ってくださいよ、主任――！

シオン：あれは――教会――

Jr.：あれ、シオンか――？

シオン：Jr. くん――

モモちゃん、ジギーさんも！ あなたたち、どうやってここに――

Jr.：わかんね、シオンがダイブした途端、視界がぼやけて――気付いたらここに来ていた。

その後、いろんなもの見せられて――

アレン：僕ら全員、主任のエンセフェロンダイブに引きずられたんでしょうか？

シオン：まさか――みんなは接続してなかったのよ。

アレン：KOS-MOS から発信されるパルスがダイブモジュールを介して逆流したとすれば、

考えられない話じゃないですよ、うちで採用してるのは、非接触式ですし。

シオン：だとしても、簡易モジュールではその負荷に耐えられないわ。なにかもっと別の外的な力がないと――

ネピリム：（ずっと、あなたたちを待ってたの）

シオン：（ネピリム――あの子は、そう言っていた――

やはり、彼女が――？)

ケイオス: いずれにせよ、ここは KOS-MOS のメインフレーム――いわゆる内的世界。

僕らの持っている記憶が共鳴した結果 創造された世界――そんな感じがする。

アレン: でも、僕にはこんな場所、記憶にありませんよ。

ケイオス: 記憶――つまり、過去に起きた出来事は、同一の時間軸、空間軸が

共鳴することによって、より強固で優先的、選別的なものになるんじゃないかな。

そう考えれば、僕やアレンさんの記憶が反映されていなくても不思議じゃない。

ジギー: 要するにこの世界は、共通の空間的、時間的体験を持った者たちによって常に変化するということか。

Jr.: KOS-MOS を介して垣間見る、俺たち自身の過去の世界――

モモ: みんな幻なんですか――？

シオン: 幻覚と現実とは、それを体験する主体者にとっては同じことよ。これは――幻なんかじゃないわ。

アレン: 主任――

ネピリム: (あなたたちは、それを受け入れなければならない)

シオン: (そういうことなのね、ネピリム――)

古教会

アレン: 人が――あの服、レアリエンかな――？

モモ: ええ、たしかにレアリエンみたいですけど――でも、ちょっと違う感じもします。

アレン: これも誰かの心の中の風景なんでしょうか、主任。

――主任？

シオン: ―――

アレン: 主任――？

ジギー: 君は――レアリエンなのか。

フェブロニア: はい、フェブロニアといいます。レアリエンの安らげる場所が欲しくてこの教会の手入れをしているんです。

シオン: フェ、フェブロニア――

Jr.: 知り合いか？

シオン: ―――

私、知ってる――知ってるわ――あなたを。

でも、嫌——思い出したくない——だって、だって——

フェブロニア：——シオン、いらっしやい。

ネピリム：——シオン。

その扉を開けた瞬間から、あなたたちは自分自身と向きあっていくことになる。

それは、とても辛くて哀しいこと——

だけどそれは、あなたたちにとっても私たちにとっても、とても大切なことなの。

—

アレン：これが、主任の心の中——

シオン：ここは——

ネピリム：重篤神経症治療施設——あなたのよく知っているところよ。

シオン：母さんが入院していた、部屋——

ネピリム：——そう。つらくて、哀しい記憶の漂う場所。あなたは、それを向き合えるかしら——

シオン：——————！

いや——

アレン：主任——？

シオン：い、いやあああああっ！

モモ：Jr. さん、ここはいったい——

Jr.：ここは——

ネピリム：そう、あなたにとって忘れがたい、あの研究プラントの奥深く——

Jr.：——————

Jr.：ガイナン——

アルベド：よく来たね、ニグレド。ルベドはどうしたんだい？

ニグレド：アルベド——

アルベド：ふふふ。

Jr.：ガイナン！

くっ！

モモ： Jr. さん――

Jr.： 大丈夫、死んじやいない――これが――あのときの、再現なら。

アルベド： くひひ――

Jr.： アル――ベド――！

アルベド： きひひひひ！

歌、歌声が――僕を――ひゃはははは！

鏡よ――僕を映せ――僕を定義しろ――！ うひゃひゃ！

僕は無限のテロメラゼだ――僕は反存在なんかじゃない――完全なる連鎖だ――！

あーっはっはっはっはっはっはっひゃっひゃははっはっははひゃひゃひゃはっはーひゃひゃっひゃひゃひゃひゃはは！

Jr.： く――

アルベド： ひゃははははははははははひゃはははひゃひゃっひゃひゃひゃひゃははひゃははっははひゃひゃひゃははは！

ひゃはははひゃはははははひゃはははははっひゃははひゃひゃひゃはははひゃひゃっひゃははひゃひゃははひゃ！

Jr.： う――

うわああああああっ！

シオン： いやああああああっ！

Jr.： うわ、うわああああっ！

アレン： 主任、Jr. くん！ いったいどうしちゃったんですかっ！ ねえっ、主任――
な、なんだ！

【 戦闘 VS ティアマト 】

フェブロニア： ごめんなさい、シオン――つらい思いをさせて――でも――

シオン： あそこにも、あなたが――フェブが二人――

フェブロニア： ――あそこに座っているのは、私じゃない。あの子たちのために創りだされた虚像――幻よ。

ここは私の妹――セシリーとキャスのためだけに創られた世界。

KOS-MOS のエンセフェロン構成能力を介して、あなたたちに見てもらっているの。

アレン： でも、なんだか幸せそうだな――

フェブロニア： これでも、あなたにはそう見えるのかしら――

アレン： ―――！

フェブロニア：ここは、あの子たちを捕らえた檻なの。――ゾハルを制御するために、人が創ったシステムによる呪縛。
でも、あの子たちにとっては現実の世界そのもの。
ここから解放してあげて欲しい、妹たちを――
お願い――私たち[レアリエン]の未来のためにも――。

シオン：レアリエンの未来――

ネピリム：レアリエンだけではないわ。人も、物も、すべての意識が存続するためでもあるの――
私やフェブが存在できるのは、こうした意識の世界の中だけ。
実在の世界には、わずかな時間しか干渉できないの。
だから、あなたたちを呼んだ。――未来を変えるために。

シオン：未来を変える――

ネピリム：――見て。

アレン：あの惑星は――

シオン：旧ミルチア――

あれは――KOS-MOS？

ネピリム：あの波動は――ウ・ドゥと呼ばれる意識体。

Jr.：ウ・ドゥだって――！？

ネピリム：ウ・ドゥは十四年前――ミルチア宙域を巻き込んだ局所事象変移の源。
いま見た光景は、そのウ・ドゥと本来あるべき姿となったKOS-MOS とが出会ったときに起こる――
未来の映像[ビジョン]。ウ・ドゥはじき目醒める――
”彼”を目醒めさせようとする者たちと”彼”を求める者の意識を糧として――

Jr.：目醒めるのか――奴が――

ネピリム：いま見た未来は、無限にある可能性事象のうちのひとつ――
でも、決定されているわけじゃない。新たに生じた僅かな波が、全体に波紋を広げることもある。
事象は刻々と変化する、漂う波のようなものだから――

シオン：――その波が、私たちだというの？

ネピリム：――その前に、――そのために、過去と向き合って欲しかった。
でも、まだ無理なのね――ごめんなさい。

シオン：――なぜ、私たちなの？

ネピリム：あなたはグノーシスと直接接触した。

シオン：――――！

ネピリム：けれどあなたは、”あなたのまま”でいる。だから――

シオン：だから――？

ネピリム：いずれ話せる時が来るわ。すべての始まりであったあのとき、あの場所――

あのミルチアへ行けば――そうすれば――

シオン：――待って！

ネピリム――――

ケイオス：行こう、シオン。扉の向こうへ――

Jr.：――そうだな。俺たちは、そのために来たんだ。

シオン：――――ええ。

――

シオン：KOS-MOS――ここがあなたの――

――汝ら神の如くなりん。

KOS-MOS 深層領域――プロテクトを解除します。

⇒ [サブストーリー6：シオン篇2](#)

―― 

Jr.：戻ってきた――のか――

シオン：おはよう、KOS-MOS――

KOS-MOS：おはようございます、シオン。

ケイオス：どうやら、みんな帰って――こられたみたいだね。

アレン：――主任。

――よかった――無事で。よかった――――

シオン：アレン――くん――

— 

第 422 艦隊司令長官：——ほう、議員閣下。それは本職の任務を阻もうという意志の表明でしょうか？

リューリック：いやいや、提督。こちらも所属は違えど、星団連邦軍艦隊——

助力に駆けつけたのであって、妨害などあり得ないことだよ。

第 422 艦隊司令長官：——そう願いたいものですな。

（ちっ、ザルヴァートルめ。私兵まで持ち出してきおって——）

ラピス『クーカイ・ファウンデーションを包囲任務中の艦隊に報告します。

ただいま、容疑者より新たな証拠物件の提出が申告されました。』

リューリック：ほほう、それでは、連邦法第 231 編 67 章 7114 条が適用されることになるね。

審理終了まで、クーカイ・ファウンデーションへの武力行使は凍結せねばなるまい。

いやいや、ここまで来たのが、無駄足になってしまったかなあ。

第 422 艦隊司令長官：（——くっ、白々しい）

デュランダル 

シオン：対グノーシス専用人型掃討兵器 KP-X 略称 KOS-MOS のメモリーデータです。

プロテクトレベル AAA——改竄の余地はありません。

ラピス：たしかにお預かりします。おって嫌疑が晴れるまでミルチア太陽系圏を出ないように。

メリィ：いやあ、連邦叛逆罪で捕まる羽目にならんで良かったわあ。

Jr.：よくいままで、持ちこたえてくれたもんだ。

シェリィ：その”恩人”が、ガイナン様と話しておいでですわ。

ガイナン：——いずれにせよ、助かったのは事実ですよ、議員。ぜひお礼はさせていただきたい。

リューリック『いいえ、ガイナン・クーカイ代表理事、あなたにお力添えできるのは、

我々ザルヴァートルにとって、望外の幸福——お礼などと、おっしゃいますな。』

Jr.：なんだあ、あのおっさん、わざわざ出張ってきたのか。

リューリック『その声は、小さい理事の方か。どうやら、身の証を立ててくれたようだ。

これからも、ガイナン代表理事のために、尽くしてくれたまえ。』

Jr.：———ああ。

リューリック『――それでは、ガイナン様。これにて失礼いたします。

もはや、我々の艦隊の進駐は必要ないでしょう。』

ガイナン： ええ、無事の帰還をお祈りします。

（ガイナン様――だと？）

リューリック『――では。』

ガイナン： （うさんくさい男だ――）

シェリィ： ちび様、浮かない顔をされてますね。なにかあったのですか？

Jr.： ん、ああ、いろいろとな――正直いまだに信じられねえよ。

ガイナン： ――ご苦労だったな。

Jr.： そうでもねえ。けど――

厭なこと、たくさん思いだしちまったよ。

ガイナン： （――らしくないな。ヤツ[アルベド]のことか？）

Jr.： （――ああ

なあ、ガイナン――あいつ[アルベド]、きっと生きてるぜ）

ガイナン： （！ ――会ったのか？）

Jr.： （いや、そういうわけじゃねえ。けど――またうずき出したんだ、右胸が）

ガイナン： （そうか――お前がそう感じるなら、そうなのだろうな――）

Jr.： （――――――）

シオン！

シオン： なに、Jr. くん――？

Jr.： あの娘[こ]――ネピリムで名乗ったんだよな。

シオン： え、ええ。

Jr.： たしかか――？

シオン： そう、だけど――

Jr.： そうか――

シオン： どうか――したの？

Jr.： ん、いや――もしもあの娘[こ]が俺の知っている”あるモノ”となんらかの関係があるのなら――

これから、忙しくなりそうだぜ――

